

● シリーズ 私の見た日本 Vol.214

コミュニケーションに「苦勞」している日本

呉 楠(ウー ナン)

中国大連市生まれ。2009年中国大連理工大学建築学専攻卒業、2012年新潟大学大学院自然科学研究科環境科学専攻(博士前期課程)修了。同年、安井建築設計事務所入職。現在、日建設計コンストラクション・マネジメント



本能を抑えながらのコミュニケーション

今年5月に新型コロナウイルスは5類感染症に移行したことから、この夏から秋にかけてお祭りや花火大会など「4年ぶりの開催」という言葉とともに、地域行事や地域活動が本格的に再開しています。2009年に日本への留学を始めた頃、「なぜ日本人はこんなにお祭りが好きなの？ 暑くて人混みで大変ちゃう？」と疑問をもちましたが、参加したら「めっちゃ楽しい！」という気持ちになり、自然と一緒に踊りたくなりました。そして、私もお祭りが大好きになりました。その後、日本のお祭りの目的は「神様に感謝する」「神様を喜ばせる」という意味だったことを知り、「え？ 神様のための演技？ 普通に喜んで遊んでええやん！」とちょっと首を傾げました。徐々に、それぞれ日本人のコミュニケーションの特徴で、自分の喜びだけでなく、まわりの人も喜ばせること、さらに自然、神様からの恵みのなかで幸せに生きていることに感謝していることがわかりました。しかし、それはお祭りの目的や意義であり、お祭りが好きになる理由ではありません。日本人がお祭りが大好きな理由、そして私のような外国人もお祭りが好きになる理由は一体何でしょう。

一言でいうと、本能です。集まってコミュニケーションを取りたくなるのは人間だけではなく、すべての哺乳類が生きていくための本能だということを2022年に理化学研究所が発見しました。哺乳類の脳内には「アミリン」という重要な神経伝達物質があります。しか

し、マウスの実験により、群れで暮らす雌マウスを窓柵で隔離すると「アミリン」が減少し、1週間でほぼ枯渇することがわかりました。「アミリン」が減少すると、脳内の社会的機能が低下し、活気がなくなります。孤独なマウスを仲間と再会させると、アミリンの発現は2週間で元に戻り、元気になりました。人は集団にいと理性をコントロールする「内側前頭前野」、他人の痛みに共感する「島皮質」の活動が低下し、脳内は興奮状態になりやすく、日常生活にない快感が得られるとも考えられます。

本能を抑えてまわりを気遣う文化は、日本が世界一ではないかと思えます。特に普段はまじめで勤勉な日本人にとって、お祭りは本能のエネルギーを爆発させる良い機会になるでしょう。

コミュニケーションをデザインする

日本は中国と比べて、お祭りのような地域住民が自発的に参加するイベントが充実しており、また、その地域文化や歴史的背景によって内容が異なります。イベントに参加することで、ハードなまち並みとソフトな文化を同時に楽しめることにとても魅力を感じます。

中国にある大学の建築教育は、芸術性を重視し、奇抜なアイデアをもつ建築家を育てることが主な目的です。私は、芸術性のような感性より計画性のような理性が勝るため、短期での単体建築設計より、長期にわたって形成する美しいまち並みに興味が沸きまし

た。大学時代に、日本の地域住民等が「まちづくり」に参加できるプロジェクトがあることを知り、日本の大学院への進学を決めました。「まちづくり」は、国の都市計画法に定められたルールに基づいて、地域住民が主体的に環境を改善、地域の魅力や活力を高めるために行う活動です。たとえば、山村集落の再生、伝統文化の保存、地域景観・生活環境の改善、中心市街地の活性化、高齢者の介護、子どもの教育など様々な活動があります。その概念と内容は時代とともに変化していて、中国語で適切な訳語を探すのはとても難しいです。その「まち」は「街(town)」や「都市(city)」より、地域社会としての「コミュニケーション(communication)」の意味合いが強いです。中国語に強引に翻訳すると「地域版都市デザイン」になると思いますが、そもそも中国語の「地域版」と「都市デザイン」は矛盾し、高度な中央集権制の中国では、都市デザインのようなハードなことは国や地方の行政が主体で行うので、地域住民が発言や参加をすることはほとんどできません。

日本のまちづくりは、その地域や活動の目的に合わせて、参加者、参加方法、役割分担などコミュニケーションの「仕組み」を「デザイン」できることに驚きました。

大学院では、新潟大学の学生と長岡市栃尾表町(以下、表町)の住民が協働して行うまちづくりを研究していました。この活動は1997年から始まって、仕組みの変化がありながらも、毎年多くの学生、住民、専門家が



O³のゲストエリア



O³の執務エリア

参加しています。

表町は新潟県の中央部に位置し、日本有数の豪雪地帯で、まちの通り沿いには町屋と雁木が連なり、雪国の生活のなかで生まれた独特の景観をもっています。

雁木とは、奥行きが1間弱の玄関前の庇で、家によって高さや幅が様々で、その家の職業や家々の個性も表しています。それぞれの雁木が連なり、自分の玄関前だけではなく、安全・快適に歩けるように独特なまち並みが形成されています。

都市計画という壮大なスケールで、雁木は大海の一滴にすぎませんが、その一滴のために学生は住民と協働し、雁木のデザインコンペを行い、地域住民投票で選ばれた案を行政と専門家の支援で建設するというまちづくりの仕組みをつくりました。中国で行政を発動したら計画から竣工まで1週間もかからない庇の建設工事を、ここで1年かけてたくさんのコミュニケーションを交えながら進めていくまちづくりは、庇づくりより遥かに難しいです。大海の一滴には関係者の様々な苦勞が潜み、庇の完成以外にもたくさんの信頼関係が生まれ、収穫を得たのでしょう。

コミュニケーションをマネジメントする

大学院を修了後、建築設計事務所得意匠設計の仕事を経て、現在は建設事業を中心とするコンサルティングの仕事をしており、いずれもクリエイティブな仕事です。クリエイティブなアイデアを生み出すためには、積極的に脳に対して刺激をしなければなりません。その刺激は、旅行などによる環境の変化もあるし、出会いなどによるコミュニケーションの変化もあります。

コロナ禍で定着したテレワークにより、コ

ミュニケーション不足に悩んでいる企業は少なくはないでしょう。日本労働組合総連合会の「テレワークに関する調査2020」によると、37.6%の労働者は「上司、同僚とのコミュニケーションが不足する」をテレワークのデメリットとしてあげられています。しかし、コミュニケーションが不足する本当の理由はテレワークでしょうか。私は違うと思います。そもそも、コミュニケーションを取りたい人はどんな環境でも積極的に会話をする、一方、コミュニケーションを取りたくない人は対面でもずっと沈黙しているのではないのでしょうか。

以前、日本人の友人からプレゼントで「KY式日本語」という本をいただきました。当時は、どういう意味なのかよくわかりませんでした。しかし、日本の企業に就職してから、その意味がだんだんわかってきました。私は、本に書かれていたような「KY」こそ、コミュニケーションが不足する原因ではないかと思っています。人の顔を伺いすぎて、自分の本音をなかなか言えなくなることはありませんか。たとえば、会議中「これはみんな知ってることかな、聞いたら時間の無駄になるかな」、「これが正解なのかな、否定的な意見を言ったら相手を傷つけてしまうかな」など、本当に言いたいことがあっても、発言することを躊躇する機会は少なくはないでしょう。

仕事だけではなく、すべてのことで理想の結果を出すためには、遠慮せずに直球で議論し、行動することが必要です。「KY」を気にしすぎるとコミュニケーションを阻害してしまう場合もあります。その極端な一例は、2019年当時の国土交通副大臣が総理と副総理の地元を結ぶ道路事業で利益誘導に関する「付度」発言です。まだ記憶に新しいでしょう。

空気を読むというのは日本の独特な文化

で、決して悪いものではありません。空気を読みすぎないように、このときは読む、あのときはあえて読まないという判断、あるいはマネジメントが必要だと私は思います。

しかし、日本人は直接的なコミュニケーションを避ける傾向があり、直球で投げ続けると、投げる側の罪悪感、受ける側の心折れなど負の感情が生まれます。それを長期間放置すると、コミュニケーションが修復できないくらいこじれてしまうこともあります。仕事での人間関係を促進させる方法には、「飲みコミュニケーション」がありました。もう時代遅れなのではないのでしょうか。お酒を飲まなくても、同じ時間に同じ空間(オンライン空間でも可)で親密で率直なコミュニケーションを取るべきだと思います。

今年5月に、現在働いている会社の大阪オフィス「O³(オースリー)」がオープンしました。「O³」は、「Osaka Osekkai Office」の略で、「いきたくなる、おせっかいを」というメッセージが込められています。新たなオフィスは「人と人をつなげるのは人」という原点に立ち返り、ソフト・運営面も含めた挑戦、実験的なワークプレイスとなっています。ポイントの一つとしては、人と人をつなぐ専門家「コミュニティマネージャー」を配置していることです。コミュニティマネージャーは、私たち社員と何気ないコミュニケーションを行っているように見えますが、それぞれがコミュニケーションに苦勞している人々をつなぎ、言いたいことを付度なしで伝える、聞きたいことを気軽に聞けるコミュニケーションのユートピアになるのではないのでしょうか。明日、どんな人と出会えるのか、どんな変化が生まれるのか、毎日わくわくしています。



徳島県で開催される阿波おどり



大阪府で開催される岸和田たんじり祭



長岡市栃尾表町の夏